

ハッピーエンドがとまらない。

A i k a & Y u s e i

七福さゆり

Sayuri Shichifuku

termity



エタニティ文庫

もくじ

第一話	完璧なわけがない	4
第二話	不本意な交換条件	38
第三話	彼氏ができました？	55
第四話	変化	96
第五話	初めてのデート	117
第六話	彼の家で初めての	145
第七話	恋わずらい	192
第八話	リアルにハッピーエンドなんてない？	212
第九話	嘘	249
第十話	身から出た錆 ^{さび}	274
第十一話	ハッピーエンドじゃなくてもいい	291
第十二話	私がリアルで恋をするなんて	308

第一話 完璧なわけではない

都内の一等地にある高層ビルの二十二階。ここに、私、笹原愛果ささはらあいの勤めるアパレルメーカー、株式会社パルファムの東京本部がある。

「もしもし、お疲れ様、笹原です。商品の取り寄せの手続きをしてもらう時に、スタッフの態度がすごく悪かったってお客様から苦情が入ってるんだけど、何か心当たりはある?」

株式会社パルファムは、レディースからメンズ、キッズまで、幅広く扱っているアパレルメーカーで、私はここでスーパードバイザー、通称SVとして勤務している。

簡単に説明するとSVとは、各店舗と本社を繋ぐお仕事。

店舗運営の指導や商品仕入れのアドバイスをしたり、本社でこうしたいなあと思っていることを現場に伝えたり、逆に現場から上がってくる生の声を、本社に報告したりする架け橋みたいな役割を担っている。

本部からの痛いお言葉を伝えることがかなり多いので、店舗スタッフからは煙たがら

れる存在なのだ。

「本気で言ってるの? 新人スタッフが対応したからなんて、何の言い訳にもならないよ。新人スタッフを育てるのは、店長のあなたでしょ? 何もわからないスタッフに責任を押し付けるなんて、間違ってるってわかってる? お客様には私から謝っておくから、あなたは店長として何をすべきか、よく考えて。じゃあ、お疲れ様」

電話を置き、ため息をついていると、後ろから肩をポンと叩かれた。

振り返ると、今朝、東京エリアの店舗売り上げデータを苦々しい表情で睨んでいた田端エリアマネージャー、通称・田端AMがホクホク顔をして立っていた。

「笹原さん! 先月君が指導した店舗、今年初めて売り上げ目標金額を達成したよ」

データベースを開くと、確かに売り上げ目標金額を達成している。

「さすが笹原さんだ。よくここまで上げられたね!」

「いえ、店長もスタッフもすごく頑張ってくれましたから。私だけの力じゃありません」

「謙遜しなくてもいい。現に君が担当する店舗は、必ず売り上げが伸びるじゃないか」

「ありがとうございます。でも別に謙遜しているわけじゃないです。事実ですから」

ちなみにAMというのは、担当するエリア内にある店舗の販売促進や、管理を行うお仕事。

売り上げが悪い店舗が一つでもあれば上からチクチク言われるし、撤退店舗が出たら

減俸もある。お店を潰^{つぶ}してしまつたら降格ということも……

まあ、繁盛店舗を作ることができればボーナスアップ！　なんておいしいこともあるけど、このご時世、減ることはあつても増えることはまずない。

「そ、そうか……まあ、これからも頑張ってくれ」

はい、と短く答えた私から視線を逸^そらし、田端ＡＭは喫煙所へ足早に去つて行つた。

「はいっ！　ありがとうございますううう！　って大げさに喜んでおけば好印象なのに。笹原ちゃんは不器用だね」

隣の席に座っている同僚の菜々^なちゃんが、長い髪を耳にかけながら悪戯^{いたずら}っぽい笑みを浮かべた。

「……無理」

「容姿端麗^{ようしたんれい}、異例のスピードで出世してるキャリアアウーマン！　ってだけでも近寄りがたいのに、そんな態度取つてると更に近寄りがなくなっちゃうよ」

菜々ちゃんに言われた通り、私は会社の人たちから取っつきにくい奴だと思われている。

雑談の輪に入ることはまずないし、仕事の用件で話しかけられた時も、相手が話しくそうにしているのがわかる。

「もったいないな……確かに取っつきにくいように見えるかもしれないけど、実際は

そうでもないのにね」

菜々ちゃんは自分の引き出しからミルクキャンディを取り出し、私のデスクにそっと置いた。

「ありがとう、くれるの？」

「最近オーバーワーク気味でしょ？　糖分摂取しときなよ。あと、イライラにはカルシウム。ミルクキャンディなら両方とれるっしょ？」

「別にイライラしてるわけじゃないんだけど……」

取っつきにくいと評判の私だけど、年が近いこともあり、菜々ちゃんだけはこうして壁を作ることなく、自然に接してくれる。いや、もう一人いるといえはいるんだけど……

「髪の毛サボサ感が、イライラカリカリしてるように見えるのに拍車をかけているんじゃないかと思うけど……」

「えっ！　嘘、そんなに？」

頭に手をやると、確かにポワポワした感触。直してくると一声かけ、私は化粧室へ急いだ。

「うわっ……これはひどい……」

今日は移動が多くなることがわかっていたので、邪魔にならないように、わざわざ早起きをしてアップスタイルにしていた。不器用な私には、すぐに直せそうにないし、時

間をかけて直している余裕もない。どうあがいても定時までに終わりそうもない仕事如山積みで、ダラダラやっついては終電にも間に合わなくなってしまう！

幸いなことに今日はもう内勤だけなので、外勤先の店頭で乱れた姿をお客様にうつかり見られる心配はない。応急処置程度に整え、急いで化粧室を出た。

このお仕事に就くきっかけは、大学生の時にアルバイトの販売員として、この会社の門を叩いたことだった。

私はこの仕事に向いていたみたいで、バイトで働くうち、ずっとアパレル業に携わりたいと思い始め、勤めていたショップの店長に今後の進路を相談した。

当時はバイトとして三年以上働けば、正社員として雇ってもらえる制度があったので、卒業後も引き続き販売員として働かせてもらうことになった。

そして、私が正社員になってからちょうど一年が経ったある日、大型ショッピングセンターに新店舗を構えることが決まり、私はそこへ店長として配属されることになった。店長を二年ほど経験したあと、バルファムで史上最年少のSVとして、本社で働かないかとの誘いを頂き、現在に至っている。

SVになって二年目で、現在二十六歳！

まだまだ学ばなくてはいけないことだらけで、毎日が忙し。

オフィスに戻る廊下を歩いていると、前からある男が歩いてくるのが見え、思わず顔

をしかめた。

「うげっ」

「お、外勤から帰ってきたのか。お疲れ」

「オツカレサマデス」

彼の名は、たかみやゆうせい高宮悠正。年齢は二十九歳で、同じ会社でバイヤーをしている。

バイヤーとは、シーズンごとに商品を買付けしてくるお仕事。彼の買い付けてくる商品は必ずヒットすると噂されていて、若いものすごいやり手だと業界内では注目を浴びている。

背がとても高く、顔立ちは一つ一つのパーツが整っている。髪型はデザインカットされたショートレイヤースタイル。まるで染めているかのようなダークブラウンの髪は、どうやら地毛らしい。

何も知らない人からすればバイヤーというより、モデルと言った方が納得できるかもしれない。

仕事ができてこれほどよい素材を持っている彼は、女性社員からとても人気がある。いや、社内だけではない。バレンタインには、同じビルの他社の女性からもチョコを貰い、そのあまりの多さに困惑していた。

「つーか、人を見ていきなり『うげっ』はないだろ？」

蚊の鳴くような声で言ったつもりだったのに、地獄耳恐るべし。

「むぐつ！　ちょ、ちよつと止め……っ」

大きな手で顔をムギユツと掴まれた。私の顔は彼の手の中で、さぞやマヌケな顔になっていることだろう。

「ん、なんだその髪。アホ毛だらけになってるぞ」

首を左右にブンブン振って、大きな手からやっと逃れられた。睨みつけてやると、ニヤリと笑われる。ああ、腹が立つ！

取っつきにくいと評判の私に唯一ちよつかいをかけてくる人物。それがこの男だ。

いつも顔を合わせるたびに何かと突っかかってきて、私のイライラスイッチを見事ONにする。

こうイライラさせられると、この長い足や整った顔も全て嫌味に感じられるから不思議！

「アパレル業なんだから、身だしなみは人一倍気を付けろよな」

もっともな指摘に、グツと喉を詰まらせる。

これから外勤に行くのなら、気を付けるに決まってるじゃない！　けど、仕事が山積みで、直す時間すら惜しいんだっつーの！

……と言いたいところだったけど、『外勤も内勤も関係ない。意識の問題だろ』と言

われるのは目に見えているので、せめてもの反抗のつもりで顔を逸らした。

高宮さんの言っていることが正しいのはわかっているけど、こう突っかかれては、意地を張りたくもなる。

「ドーモスミマセン。直してまいりますので、失礼します」

回れ右をし、化粧室へリターン！

「あーっもう、最悪！　最初からちゃんと直しておけばよかった！　よりによってあいつに指摘されるなんて！」

もう二度と言われてたまるか、と丁寧に直していたら、案の定かなりの時間がかかってしまった。

「……終電までに、帰れるかな」

落ち込んでいても仕方がない。

お財布がタクシー代で薄っぺらくなってしまうのを防ぐため、やるしかないのだ。

デスクに戻り、葉々ちゃんから貰ったミルクキャンディを口に入れ、ガリガリと噛み砕く。

私のイライラよ、鎮まれ！

そう心の中で唱えながら、山積みになっている仕事に手を付け始めた。



「ああ、疲れた……」

二十三時を回った頃、やっと自宅へ帰ってこれた。

販売員時代は実家で暮らしていたけど、SVになってからはお給料も上がったし、帰りが遅くなることが多いので、会社から電車で一駅場所にあるこのマンションで一人暮らしを始めたのだ。

ちよつと無理して借りた築浅の1LDK。

他人には決して見せられない私の秘密が、ギッシリ詰まったお城。

会社ではやり手と言われ、完璧と褒めそやされる私だけ……

そう、完璧なんてありえない。

人には何かしら秘密があるものだ……そして、私も例外ではない。

「はー……今日も疲れた。先にお風呂入ろう」

バスタブにお湯を溜めて^たいる間に、クローゼットからくったくたになった上下の色がバラバラのスウェットを取り出す。オプションは毛玉！

取り外し可能ですよ、いかがですか？ お客様。……なんてね。

オフィスに長時間いると、エアコンで空気が乾燥するから、眼球にこれでもかというほどコンタクトが張り付く。それを慎重^{しんちょう}に外したあと、防水CDプレイヤーに、休日を使って編集したお気に入りCDをセット。いざ、バスルームへ！

さっさと化粧を落とし、バスタブに浸かり、CDを流す。

中に入っている曲は、流行りの曲でも懐メロでもない……アニメに使われる曲、つまりアニソンオンリーだ。

「んー……ここの高いところが上手く歌えないなあ。次の休みに一人カラオケで極めますかっ！」

次々と流れてくるアニソンの歌詞は、もちろんすでに暗記済み！

数曲歌うと、すぐに汗だくになる。バスルームだと、反響してカラオケっぽくなるから好き。隣人に聞こえてたら、恥ずかしくて死ねるけど。

「うっ……歌いすぎてクラクラしてきた……そろそろ出よう」

CDを流しっぱなしにして、ノリノリで頭や体を洗い、入浴終了。

服を先に着ると濡れた長い髪の毛のせいで、襟首がどうしても湿ってしまうので、下着姿のままドライヤーをあてる。そして用意しておいたくったくたのスウェットに袖を通した。

これから過ごす癒しタイムを、ジメジメ襟首に邪魔されるわけにはいかないのだ。

最後に、長年愛用している眼鏡を装着。レンズはビン底級に分厚くて、支えている目頭や耳にズッシリとした重みを感じる。だけど薄くすると高くなるし、普段はコンタクトだから眼鏡にあんまりお金をかけたくない。

SVになってお給料が上がったとはいえ、アパレル業は出費がかさむ。

SVは各店舗を回り、店頭に立って指導をすることが多いので、自然とお客様の目に触れてしまう。店頭では、誰が販売員かなんて関係ない。お客様に話しかけられたら、SVも販売員として接客することになるので、うちの会社ではSVも販売員と同じく、自社の服を着ないといけないという決まりがある。

しかも、着ていい服は新作に限定されている。なぜなら販売員は動くマネキンだからだ。前シーズンの物を身につけるなんてもつてのほか！ お客様は自分達が思っているよりも、注意深く私達を見ている。長めのチュニツクの下から少しだけ見えるショートパンツや、インナーとして着用しているキャミソールですら、どこにありますかと尋ねられることは少なくない。

よって、シーズンが変わるたびに、全てを買い替えなければいけないのだ。

自社製品は、手続きを踏めば大体五十〜七十%割引きで買うことができるけど、上から下まで全部揃え直すとなると、かなりの出費だ。

さらに販売員時代は、シーズン物であっても、売り切れになって店舗内にない商品はある着てはいけないという暗黙のルールもあった。なぜなら動くマネキンなのに、売れない商品を着ても何の意味もないからだ。

お給料が上がった今は大分楽になったけど、役職が全くなかった薄給時代は相当苦しかった。失礼なことにこの仕事に足を踏み入れるまでは、販売員なんて誰でもできると思っていたけど、今となってはそんな自分にビンタをしてやりたい気分だ。

「おっ腹空いたーっ！」

ふんふんとさつき歌っていたアニソンを口ずさみながら、作り置きしておいたカレーに福神漬けを添え、テーブルに置く。床に置いた低反発クッションに座るやいなや、ポータスで奮発して買った四十二型のTVをつけ、今流行りのドラマやバラエティには目もくれず、ブルーレイレコーダーを起動し、録画リストを見てニヤリと笑う。

録画リストには、アニメタイトルがズバリ。

「よし、ちゃんと録れてるな。社会人になると、夕方放送のアニメがリアルタイムで見れないのが切ないねえ」

ペラペラと独り言を吐き、アニメを再生させてじっくり観賞。

食事とアニメを楽しんだあとは、食器を洗ってさつきと歯磨き。寝る準備を整えてすぐにベッドへ向かう。

でも、準備を整えただけで、まだ寝るつもりなどさらさらない。かといって、食べてすぐに寝ると牛になるっていうのを気にしているわけではない。

右手には携帯ゲーム機、そして左手にはゲームの充電器。そして充電器をコンセントに差し込み、ベッドにゴロリと寝転ぶ。

起動させたゲームは、女性向け恋愛シミュレーションゲーム。通称「乙女ゲー」。

乙女ゲーとは自分がブレイヤーになり、好みの彼との恋愛を楽しむゲームのことで、私は毎夜このゲームで萌え転がる生活を送っている。

「昨日はいいところで寝落ちしちゃったからな……まあ、その分、今日プレイするのが待ち遠しくて、仕事にも精が出たけどねっ！」

うつ伏せになって、枕にゲーム機を置いてプレイ開始。

前にセーブしたポイントを読み込むと、少し照れた表情をした彼の立ち絵が、いい雰囲気音楽と共に画面に表示される。

『愛果、話があるんだ。聞いてくれるか?』

イヤホンを通して、低く甘い声が耳元で囁かれる。そしてすぐに選択肢が出現。『いいよ』or『イヤ』。

ここで忘れずにセーブをしないといけない。『いいよ』バージョンのシナリオを見たあとで『イヤ』バージョンも見ないといけないからね！

セーブ完了を見届け『いいよ』をセレクト！

『オレ、お前が好きだ。最初はずつとうざったい奴だって思ってたのに……なんでだろうな』

ゲーム内の男性キャラが頬を染め、画面越しに私を熱い眼差しで見つめてくる。

『好きだ愛果。オレと付き合って欲しい』

「うきやうっ!!」

深夜だということも忘れ、ベッドの上で転がりながら叫ぶ。

攻略本や攻略サイトを見ずに自力でやり続け、はや五周目！ 笹原愛果ついに告白されました!!

ああ、なんて至福の時間!! 私もう、萌え死ぬかもしれない！

——私の秘密……誰にも知られるわけにはいかないトップシークレット。

それは、オタクだということ！

「ふう、このゲーム全然期待してなかったけどすごい当たりだったな。まあ、でもやっぱり私の最萌は『らぶメモ』の仲村くんしかいないけどっ！」

どんなに疲れて帰って来てもアニメチェックは欠かさないし、乙女ゲーをしないと一

日が終わった気がしない。というか、眠れない。

本屋ではファッション雑誌よりも、漫画や恋愛小説の陳列棚に足が向くし、会社の飲み会の二次会なんかでカラオケに行った時には、流行ってる曲がわからなくて、内心ハラハラ。

有名歌手がアニメの主題歌を歌っていることが最近ではよくあるので、その辺りを歌おうかと思ったりするけど、画面にアニメ絵が流れてしまったら気まずいので、なかなか選曲できない。

……というよりも、会社の飲み会に行く時間があるのなら、心ゆくまでオタク趣味に勤しみたいというのが本音。

なので休みの前日は必ず直帰し、朝までアニメ・乙女ゲー三昧。休日はアニメフィギュアに溜まった埃をチマチマ掃除して過ごす。

こんな生活をかれこれ十数年は続けているわけで、年齢〓彼氏いない歴を華麗に更新中！

でも、リアルで恋愛する気はこれっぽっちも起きない。だって二次元キャラの方がリアルな男の人より格好いいし、優しいし、自分だけを見てくれる。

二次元キャラばかり観賞しているせいかな、理想がかなり高くなっているのかも。この歳になると、周りの友人から彼氏の愚痴を聞くことが多々ある。話を聞いている

と、浮気なんて日常茶飯事。その他にも暴力を振るわれたり、彼の両親との折り合いが悪くて、彼のことも嫌いになり破局したとか、同棲し始めたら彼のイメージが悪い方へ変わってしまった等々……聞いているだけで鬱になる。

「そんなの絶対やだ！ はあ、やっぱり二次元は最高！ 仲村くん最高！」

今でこそオタク趣味を秘密にしているけど、中学生の頃までは特に隠していなかった。

アニメキャラがプリントされた筆記用具を普通に使ってたし、趣味の合う友達とアニメやゲームの感想を言い合ってたし、恥ずかしいとも思ってたかった。

隠すようになったのは忘れもしない、中学二年生の時に失恋した時からだ。

その頃は二次元限定じゃなくリアルでも恋をしていて、同じクラスのスポーツ万能・成績優秀・容姿端麗で女子から人気があった桜井くんに、他の女子と同様に淡い想いを寄せていた。

アイドル的存在だったので、想いを伝えようとは思っていなかったけど、一言でも話せた日は幸せすぎて、夜ベッドの中で何度も思い出してはドキドキして眠れなかった。

そんなアイドル桜井くんと、席替えで隣の席同士になった時には、平然とした顔をしていたけれど心の中で毎日お祭り騒ぎ。神様ありがとうございます！ と叫びたくなるような日々を送っていた。

そんなある日のこと、桜井くんが消しゴムを忘れて、なんと私に貸して欲しいと頼ん

できたのだ。もちろん二つ返事でOKに決まっている。私ははやる気持ちを抑え、ゴソとペンケースから消しゴムを出し、ドキドキしながら桜井くんの手に乗せた。少しだけ指先が触れてしまつて、頭の中がいつも以上にお祭り騒ぎになっている私に対し、桜井くんは眉をひそめて、ジッと消しゴムを睨みつけていた。

当時、私が愛用していた消しゴムは、十八時から放送していたアニメのイラストがプリントされた物。

どうしてジッと見ているのだろう。

もしかして彼もこのアニメが好きなんだろうかと、おめでたいことを考えていた当時の自分を張ったおしてやりたい。

当然彼はそんなことを考えているわけもなく、嫌悪感もあらわに私を横目で見た。

「……なんでこんな消しゴム使ってるの？ キモッ！」

嫌そうに消しゴムを使ったあと、私の手に触れないようにそおとと返してきた。

もっと早く気づけばよかったのだが、私はその時初めて自覚したのだ。

オタクは一般人には受け入れにくい存在だということを……

それから私は、徹底的にオタクを隠すようになった。高校に上がる時、都合良く父の転勤によって田舎から東京に出てきたため、私がオタクだと知っている人は周りに誰もいなくなった。

もう、あんなしょっぱい思いはごめんなので、今では隠れオタクに徹している。

「そういや明日の髪型決めてなかった。どうしようかな……珍しく内勤だけだし、下ろしたままにしとくか」

髪に触れると、夕方高宮さんに絡まれたことを思い出す。

あいつは、オタクとかすぐ嫌いそうだな。オタクとは無縁な生活してそうだし……休みの前日には、オシャレなバーに行つて、横文字のこれまたオシャレな名前のお酒を飲みながら、ダーツとかしてそう。もちろん、女付きで。

そして遅くまで飲んだにもかかわらず、次の日には早起きをしてドライブとかして、アクティブに休日を過ごしてそう。もちろんこっちも女付きで。

あれだけモテるんだし、きつと女性をとつかえひつかえしてるに違いない。もし、あの人が私がオタクだつてバレたらどうなるんだろう。

今でさえ何かと絡まれているんだから、きつともっと悪化するに違いない。

『うわ、お前オタクなのかよ。気持ち悪い趣味してんな。外勤でボロ出すなよ？ お客様が気味悪がるからな』

うんうん、言いそう。

『TVとかでよく特集されてるよな。お前も「萌え」とか言ったりすんの？』

誰が言うか!! ……まあ、たまには言うけどさ。

「ぐふっ!!」

……想像しただけで大ダメージをくらった。
 やっぱり隠れオタクに徹するしかない、うんうん頷きながら、クリアしたゲームの
 エンドロールを眺める。

坦々と流れるスタッフの名前をぼんやりと見ていると、眠気が襲ってきた。

ああ、寝たらダメ……

このエンドロールのあとにある、クリア特典のエピソードを見ないといけないんだ
 から。

必死に堪えても仕事の疲れで、上瞼と下瞼が仲良しになってしまい、エンドロールが
 終わる前に布団もかけず、眠ってしまった。



翌日、布団をかけずに眠ってしまった私は悲惨なことになっていた。

「さ、笹原ちゃん。どうしたの？ 顔、真っ赤だけど……」

葉々ちゃんが、心配そうにこちらを見ている。

「……大丈夫、ただの風邪だから」

資料を確かめようと下を向こうものなら、容赦なくズルズルと鼻水が垂れてくるので、
 慌てて上を向く。何度鼻をかんでも、十分も経たないうちに垂れてくるから、いい加減
 鼻の下も痛いし、かむことを諦めたのだ。

寒気がするのに顔だけ熱くて、脳みそがグツグツ煮えてるみたい。気を抜くとぼんや
 りしてしまいそうなので、眉間にしわを寄せて気合いを入れ続けている。

多分、熱がある。しかも高熱……

体温計で測ってもいいのだけど、熱があるのを自覚すると尚更具合が悪くなりそうなので、
 あえて測ってない。仕事が山積みだから休んでなんていられないのだ。食欲は全
 くないけど、水分だけはこまめにとらないと……

スポーツドリンクを買いに行こうと、フラフラしながらエレベーターの横にある自販
 機を目指す。地面が歪んで見えることにわけもなく感動！ いやいや、外勤だったら確
 実にアウトだった、内勤でよかったと心底感じていると、目の前が急にワントーン暗く
 なり、それを立ちくらみだと認識した時には、体が傾いていた。

どこかに掴まらなくては！ 手を伸ばすと、その先にはよりにもよって一番頼りたく
 ない男がいた。

「どうした、大丈夫か？」

私の腕をしっかりと掴み、慣れた手付きで腰を引き寄せる。

わあ、よくこうして女の人を抱き寄せてるんだろうなあ……じゃなくて！　こんなところ誰かに見られたら誤解される！　弱っている今なら、そのショックだけで死んでしまいたい。

「だ、大丈夫です」

慌てて離れようとしても体が言うことを聞いてくれず、高宮さんに体重を預けるしかない。

「ん？　なんかお前……ずいぶん体熱いな。それに顔も真っ赤」

腰に添えられた手を意識すると、更に体温が上昇するのがわかる。

「なんでもありません。すみません、すぐに離れますから」

気力で体を動かそうとすると、高宮さんの手にぐつと力が込められた。

「ちょ……っ！」

抵抗しようとした瞬間、もう片方の大きな手が私の額を覆う。熱のせいで額に汗が滲んでいるから、触れられたくない。

「や、止めて下さい。汗が……」

「お前、熱あるぞ。病院には行ったのか？」

絶対気持ち悪がられると思ったのに、高宮さんは一切気にしていないようだった。熱があるせいで、幻覚でも見ているのだろうか。

とにかくこの状況から逃れなくてはと、また体を離そうと試みる。

「暴れるな。おとなしくしてろ」

次の瞬間、私の体は宙に浮いていた。

「きゃっ……!？」

自分の発した高い声で、頭がズキリと痛んだ。自分が一体どんなことになっているのか、状況を整理するのに、瞬き数回分の時間がかかる。

そして現状を理解し、気絶しそうになった。

なぜなら、大嫌いな男に乙女の憧れ『お姫様抱っこ』をされていたからだ。

「な、何するんですか！　離して下さい」

「だからおとなしくしろって言ってんだろ？」

もっと暴れてやりたいのに、これ以上は体に力が入らなくて、暴れられそうにない。うう、無念……

ようやく観念した私を、高宮さんは医務室へ連れて行った。

医務室といっても仮眠用のベッドと救急箱があるだけの部屋なので、気休め程度の処置しかできない。

高宮さんは私をベッドに座らせると、救急箱から体温計を取り出した。

「ほら、測れ」

「いえ、結構です。測って熱があることがわかったら、余計具合悪くなりそうなので」
立ちあがってオフィスに戻ろうとすると、高宮さんに肩を押されてバランスを崩し、
またベッドへ逆戻りさせられた。

「な、何するんですか……」

「変な駄々をこねるな。自分で測るのが嫌なら、俺が測ってやろうか？」

高宮さんが口角を上げ、ニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべる。悪人面とは、まさに
このような表情のことを言うのだろうと、ぼんやりした頭で考えた。

「……自分で測ります」

高宮さんは最初から素直にそう言えばいいとばかりに、体温計を差し出す。

私は渋々受け取った体温計を脇に挟み、高宮さんから視線を逸らしてジッと待つ。し
ばらくすると電子音が鳴り、そこに表示されている数字を見ると、頭がグラリと揺れて
気分が悪くなった。

ああ、だから測りたくなかったのに……

ぐったりしている私の手から体温計を奪い、高宮さんが眉をひそめた。

「……三十八度九分……早退して、病院行ってこい」

「いえ、いいです。このくらいの熱、仕事をしてるうちに治りますから」

体調管理も仕事のうちだと厳しく後輩に指導しているのに、指導する側の私が体調を

崩すなんて、情けない。

高宮さんは意固地な私に呆れたのか大きなため息をついて、何も言わずに医務室を出
て行った。今日に限っては、いつもみたいに嫌味の一つでも吐いてくれた方がよかった
のに。嫌味を言う価値もないってこと？

ああ、卑屈ひくつになってしまう。

こんなこと考えていられない。早く仕事に戻らなくちゃ……

壁に手つきながらフラフラ立ち上がり、ドアノブに手を伸ばすと、私が開けるより
先にドアが開く。

そこにはさっき呆れて出て行ったはずの高宮さんが、なぜか私の上着とカバンを持っ
て立っていた。

「何してんだ。上に許可は取ってきたから、さっさと病院に行け」

「えっ……！　ちょ、ちょっと待って下さ……」

混乱している間に上着を着せられ、再び抱き上げられた。思わず悲鳴を上げると、ま
た自分の声で頭が痛んだ。

ぐったりする私を見て、高宮さんはため息をつく。

高宮さんは混乱し続けている私をさっさとビルの外に連れ出し、なぜか待ち構えてい
たタクシーの中に押しこめた。この辺は路上駐車を取り締まりが厳しいから、客待ちし

てることなんて滅多にないはずなのに。

「お電話でご予約頂きました高宮様ですね？」

「はい、そうです。彼女をお願いします」

予約ってなんのこと!? いつの間にそんな準備してたの!?

「あの、私っ、まだ仕事が……」

「田端AMから伝言。いつも頑張ってくれてるから、少しは休めってさ。俺もそう思う。心置きなく休め」

ボンと頭を撫でたあと、高宮さんは社へ戻って行く。

私はその背中を追うべくタクシーを降りようとしたけど、熱が更に上がってきたのか体が思った通りに動かせない。

ドアを閉めますね、と声をかけられ、返事をする前にボタンと閉まる。しかも行き先を告げていないのに、どこかを目指して走り出した。

「あ、あの、どこへ向かってるんですか？」

「え？ 病院へ向かって欲しいと伺っていましたが、もしかして違いましたか？」

「……いえ、大丈夫です。そのまま行って下さい」

いつも嫌味ばかり言って突っかかってくるくせに、こういう風の吹き回しだろう。敵に塩を送るアレ？

……ああ、ダメだ。頭が痛くて、ちっとも考えられない。目を瞑つたら、意識がどこかに飛んでしまいそう。

「お客様、着きましたよ。こちらお釣りになります」

運転手さんの声でハツとする。

少しの間、眠ってしまったていらしい。

お釣りを受け取りながらも、いつの間にお金を払ったんだろうと、ぼんやりと思う。カバンから財布を取り出した記憶も形跡もない。

「……あの、私、まだお金を払ってないと思うんですけど……」

運転手さんは、その質問に笑顔で答えてくれた。

先ほどのお客様から頂いております、と。



病院で解熱剤を注射してもらって帰宅した私は、部屋に足を踏み入れた瞬間、その場に倒れ込んだ。

今まで気合いで動かしていた体から一気に力が抜けてしまい、潰れた蛙のように床と仲良しになっている。

「ううー……」

注射を打ってもらったとはいえ、自然と唸^{うな}り声が出てしまうぐらい体がだるい。床を這いながら、なんとかソファまで辿り着いた。

しばらくの間はソファで寝そべっていたけど、寒気を感じて、このままじゃいつまで経つても治らないと、時間をかけて毛玉だらけのスウェットに着替え、ベッドに潜りこんだ。

あ、コンタクト外してない。でも、洗浄液を取りに行く気力もないから、もういいや。こんなことになるならオデコに貼る冷却ジェルや、スポーツドリンクを常備しておくんだった。

実家にいる母に助けてもらう？

いやいや、二十六歳にもなって自己管理もできていないことがバレたら、枕元でクドクドお説教が始まりそうだ。

風邪を引いたらよく眠るのが一番だと言うし、睡眠を取ればなんとかなるよね。最近寝不足だったこともあり、目を瞑^こるとあっという間に眠りに落ちた。

「……ん。あ、いたたた……コンタクトが目張り付く……」

目を覚ますと、眠る前まで明るかった室内が真っ暗になっていた。

携帯で時間を確認すると、二十三時をすぎたところ。こんなに眠ったのは、久しぶりかもしれない。

うう、目が痛くて限界！ コンタクトを外すために体を起こすと、先ほどのささはどこにもない。

「解熱剤が効いたのかな？ よかった……明日は仕事に行けそう。いや、意地でも行くけど……」

痛くて堪^たらないコンタクトを外し、ピン底眼鏡を装着する。ずいぶん汗をかいたみたいで、喉^{のど}がカラカラで痛いぐらいだった。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、五百mlのペットボトルを一気飲みする。「はあ、全部飲んじゃった……。う、お腹がチャポチャポいってる……」

一気飲みしたことを若干後悔しつつ、ソファに腰をかける。まだ少しぼんやりする頭で、明日やらなければいけないことを考えた。

まずは朝一で高宮さんにタクシー代を返して、お礼を言わないと。

あの高宮さんが、私にあんなに優しくしてくれたことが不思議で仕方がない。いつもの高宮さんなら、私を助けたりなんかしないはずだ。うん、目の前で倒れたとしても放置しかねない。いや、むしろその方が自然な気がする。

それなのに、上に許可まで取ってくれたなんて……

「高宮さんって私が思ってたより、ずっといい人？」

……いや、簡単に人を信じたら痛い目を見る。

私だって二十六年間、ただのうのと生きてきたわけではない。

もしかしたら私に恩を売っておいで、あとでたっぷりと苛めるつもりなのかもしれない。油断は禁物だ。

「……それだ！ その方がしっくりくる」

ああ、なんて高い借りを作ってしまったんだろう。

「明日顔を合わせたくないなあ……あいつ、出張ならいいのに」

バイヤーという仕事柄、高宮さんは二ヶ月に何度か、海外に出張へ行く。

海外に行ったら一週間は帰って来ないことが多いので、淡い期待を抱いた。まあ、仮に出張だとしても、顔を合わせるのが先になるだけなだけだね。

高宮さんのスケジュールを確認するために、シフト表を見ると、明日が二十八日ということに気づく。

「嘘……！」

私としたことが、仕事と熱にうなされてすっかり忘れていた。二十八日は、私が今一番ハマっているアニメの一番くじ発売日！

「……というか、あと三十分で二十八日になっちゃう！」

私はお財布だけを持ち、慌てて家を出た。

『一番くじ』というのは、コンビニや書店、アニメショップなどで販売されているハズレなしのくじのことで、景品はアニメやゲームなどのキャラクター商品。上位賞はフィギュア、下位賞はストラップやグラスといったものが多い。

人気のあるアニメやゲームのくじだと、くじの発売直後に完売することもあり。

今回私が狙っているくじはとても人気があるアニメのもので、発売された瞬間になくなる可能性が大。何ヶ月も前から待ち望んでいたんだし、なんとしてでも上位賞のフィギュアが欲しい！

「寒っ！ 上着持ってくればよかった……」

こんなことをしては、せっかく下がった熱がまた上がってしまうかもしれない。会社を早退したのは風邪を治すことに専念するためなのに、社会人として愚かなことをしているのはわかってる。でも……本能には逆らえない。社会人失格ですみません！

しかし、私はこのあとすぐに後悔することになる……

まさか、くじどころじゃなくなってしまうなんて、今の私は夢にも思っていなかった。

くじが販売されるコンビニに着き、時計を確認すると二十三時五十分。

店員さんは来たる午前零時に向けて、くじ販売の準備を急いでいるところだった。

……間に合って、よかった！

いや、油断はまだできない。同志がいなか店内を確認しなくては……！

店内にいる数人のお客さんは、お弁当コーナーやお菓子コーナーを見ていて、くじには興味なさそうだ。ホッとしながらも、くじ発売のために飾り付けられていく棚を見て、うつとりする。次々と置かれていく景品……上位賞のフィギュアは遠目からでもクオリティが高いことがわかる。ああ、早く手に入りたい！

私のあまりに熱い視線に気づいたのか、店員さんがこちらを向く。

「くじをお待ちのお客様ですね？ あと、数分で開始致しますので、もう少々お待ち下さい」

「あ、はい！」

「お客様、いつもくじを引きに来て頂いてますよね？ 今回も狙ってる景品が当たるといいですね」

は、恥ずかしい……でも、なんて感じのいい店員さんなんだろう！ なんだか幸先がいいぞ、うん。

今回のくじは一回五百円。

一応軍資金として二万円は持つてるけど、今日は五千円ぐらいで上位賞をお持ち帰りができる予感。

上位賞をゲットできた時のことを想像して、ついにやけていると、どこから視線を感じた。もしかして、店内のお客さんに見られてる？

ジロジロ見られるほど気持ち悪い顔をしたのかと、恐る恐る視線を感じた方を向くと、信じられない人物が私を見ていた。

「な……!!」

思わず大声を出してしまい、慌てて口を噤む。

な、なななななで!?

よりによって、どうしてこいつ!?

小さな顔にスラリと長い足。うさぐさいほど整った容姿には、嫌というほど見覚えがある。

私をジロジロ見ていたのは、なんと……高宮さんだった。

というか、なんでこんな所にいるの!? 高宮さんの家はこの辺じゃなかったはずなのに！

動揺のあまり、目が泳いでしまう。

店員さんとかじについて話してるのをバッチリ見られたし、こんな狭いコンビニの中じゃ、会話も筒抜け……オタクがバレた！

とりあえず落ち着かなくては……そうだ、深呼吸をしよう。

吸って、吐いて、吸って、吐いて……

バクバク脈打っている心臓をなんとか落ち着かせると、店内に設置されている鏡が目に入る。そこに映った自分の姿を見て、ハッとした。

……いや、待てよ。落ち着いて、大丈夫だ。

鏡に映っていたのは、毛玉だらけの上下色違いのスウェットを着た、ビン底眼鏡の女。会社での私とは、あまりに違いすぎる姿だ。

真っ暗だった目の前が、一気にパアッと明るくなる。気づくはずがない……絶対に！この姿を見て私だと気づけたら、エスパーだ。

現に両親ですら、実の娘だというのに外で偶然会った会社モードの私に気づかなかつたというエピソードもある。

実の親ですら気づかないのだから、他人が気づくはずがない！

そうだ、堂々としていよう。オドオドしていたら、かえって怪しまれる。

気持ちを持ち直し、堂々とくじ引きが開催されるのを待っていると……

「お前、熱下がつたのか？　ちゃんと病院には行ったんだろ？」

「……は!？」

あまりにも驚いたものだから、目を見開いて口をバクバクさせることしかできない。

え、何？　どうして話しかけてくるの？

しばらくそのままの状態でいると、高宮さんは訝しげな表情をし、腰をかがめて私を覗き込んだ。

「おい、聞いてんのか？　笹原」

そこに、エスパーはいた。

な、なんで私だってわかるの!？」

第二話 不本意な交換条件

待ち望んでいた零時をすぎても、私はくじを引けずに固まっていた。

よりによって天敵である男に、オタクであることがバレてしまうなんて！

時間をすぎてもくじを引こうとしない私を見て、さっき話しかけてくれた店員さんが首を傾^{かし}げている。そして交代の時間なのか、私を気にしながらも店の裏に入って行き、代わりに無愛想な店員が出てきた。

「すみませーん！ 一番くじお願いします。あ、ここ、回数制限ありますか？ ないなら全部引きたいんですけど」

今入って来たお客……いや同志^{ライバル}が、全てのくじを引いて景品を車の中に運んで行くのを見て、更に固まった。

こいつがいなければ、今頃私が持ってたのに！

……いや、そんなことを言っている場合じゃない。この状況をどう回避するか考えなくては！

「何、固まってるんだよ。くじ全部引かれたぞ。お前、あのくじ引きたかったんだろ？」

ところであれって何のくじなんだ？」

うう、あんたが私に気づかなければ、幸せいっぱい夢いっぱいにくじを引いて、今ごろはもう家に帰ってたはずなのに！ 悪態だけは頭の中に浮かぶのに、肝心の打開策はちつとも出てこない。

「……しかし、お前変な格好してるな。会社での姿と全然違うじゃないか。……お前まさか——」

ギョッとしてチラリと顔色^{うか}を窺^{うかが}うと、高宮さんは悪人のような顔をしてニヤリと笑っていた。

ひいひい！ こいつ、絶対なんか企^くんでる！

「こんなことが社内の人間にバレたら、どうなるだろうな？」

「お、脅^{おど}す気ですか!？」

何か話したらボロが出ると思ってた口を噤^{つぐ}んでいたのに、墓穴^{ほけつ}を掘ってしまった。そうだ……こんな格好をしているのだから、人違いですと言う手もあったんだった。

今頃気づいても遅い、あとの祭りだ。

ああ、眩暈^{めまい}がする……シヨックが大きすぎて、フラフラする。

「おい、大丈夫か？ ……ったく、病み上がりにうろついてるからだろ」

あんたのせいだったっーの！ と、思いつき突っ込んでやりたいけど、ごもつともな

ご意見なので、グツと堪えた。

「ほら、帰るぞ！ 道案内しろ」

「はっ!? な、何言つて……ひ、一人で帰れるから平気です！ 放っておいて下さい！」

「そんなわけに行くか。ほら、さっさと案内しろよ」

「いいいやー！ 人攫いー！」

誤解されるようなことを言うなど怒られたけど、おぼつかない足取りではそれ以上拒むこともできず、結局私は高宮さんの肩を借り、送ってもらうことになった。



「ここでもいいです。早く帰って下さい！」

「一人でろくに歩けもしないくせに、ギャーギャー騒ぐな」

シヨックのせいでせつかく下がった熱が上がつてきてしまったらしい。悔しいけどこいつの言う通り、一人では歩けない状態だった。

高宮さんは頑なに拒む私から鍵を奪い取り、部屋の扉を開けた。

「む、無理ですつて……ち、散らかってるんです！ このまま捨てて行つて下さい！」
「んな非人道的なこと、できるか！」

この、お節介いいいいいい！

部屋が散らかっているのはどうでもいい。問題は、私の宝物達だ。

部屋中に飾られたフィギュア、本棚にビッシリと並べられた漫画やライトノベル……入りきらなかった本は、壁際に積まれていて、それは私の身長とほぼ変わらない。

その隣にはゲームの山が二つ。右の山がプレイ済み、左の山がプレイ前ときっちり分けられている。

部屋に足を踏み入れた高宮さんは、興味深そうにキョロキョロと見回している。

何これ！ 何、この羞恥プレイ！ いっそのこと殺して下さい！

これらを見られなければ『フィギュアが好きで、くじをちょこつと引いたりする程度のオタクです』ぐらいにはごまかせたかもしれないのに、この部屋を見られたら『ちょこつと』程度じゃ済まない。

もう、絶対にバレた……どこからどう見ても立派なオタク以外の何者でもない。

「お前って、相当なオタクだったんだな」

はい、やっぱりそう認識されてます。

私の人生終わってしまった……

アイドル桜井くんから受けた仕打ちを、社内でも受けることになるんだ。

明日からの自分を想像した瞬間、体中からブワッと変な汗が流れた。

いやああああ、想像しただけで、泣きそう！

「高宮さんお願いします！ なんでもするから、バラさないで下さい！」

両手をパンツと合わせ、ギョツと目を瞑^{つむ}って懇願^{こんがん}した。いや、土下座の方が誠意が伝わるだろうか？

この際、必死さが伝わるならなんだっていい。秘密を守るためならなんだってする！ 天敵にだって、頭を下げてやる！

私が土下座をするより先に、高宮さんが口を開いた。

「本当に、なんでもするのか？」

戸惑いながらも自分にできることなら何でもすると伝えると、高宮さんは口角を上げてニヤリと笑う。

何、この笑い方……すっごく嫌な予感がある。

「じゃあ、お前。俺と付き合え」

「……は？ こんな夜中にどこへ付き合えて言うんですか。コンビニにくじを引きに行つたとはいえ、私一応病み上がりですよ？」

非常識です！ という意味を含め、ジロツと睨^{にら}んでやる。すると呆れたようにため息をつかれた。なんか腹立つ。

「バーカ、そっちの付き合えじゃねーよ。俺の女になれって意味」

エイプリルフルはとづくにすぎたというのに、この男は何を言っているんだろう。私が嫌いなくせに、俺の女になれって!? 冗談はその長い足だけにしたい。

混乱した頭の中でグルグル考える。いや、待てよ？ 嫌いなのに付き合えてことは、まさか……

「ま、まさか私のこと、セ、セフセフセフ……」

「なんだよ」

「セ、セフレにするつもりですか!? ヘンタイ!」

警戒して距離を取ろうとすると、高宮さんは間髪^{かんはつ}容れずに私の鼻を思い切り摘^{つま}んだ。

「ふぐつ……!?!」

まぬけな声を発した私を、呆れた目が見下ろしている。

「俺がそんな最低な要求をする男に見えるのか？」

「見えますよ。すっごく軽そうだし……」

「はあ!? 普通こういう場合はお世辞でも『見えない』って言うだろうが!」

眉間にしわを寄せた高宮さんが、両手で私のこめかみをグリグリと挟み込む。

「い、痛い、痛いっ! 痛いじゃないですか! 病人を虐待^{きやくたい}しないで下さいよっ!」

バタバタ暴れて抗議すると、やっと解放してもらえた。キツと睨^{にら}みつけてやると、高宮さんがまた大きなため息をつく。

あれ、もしかして呆れられてる……？

「お前さあ本当に俺の気持ち、ちっとも気づいてないのか？」

「いや、とつくに気づいてますよ。私のこと、嫌いなんですよね？ あれだけ突っかかれたら、どんな鈍い人間だって気づきますよ」

ハンツ！ と、鼻で笑いながら答えると、高宮さんは更に大きなため息をついて、頭を抱え込んでしまった。

……なんで？

「あのー……？」

頭を抱え込んだ高宮さんを恐る恐る覗きこむと、ジロリと睨まれた。

「いろいろちよつかい出してたのは、あれだ。お前に構うキツカケが欲しかっただけ」
はああ？

思わず首を傾げると、高宮さんは自分の頭を乱暴にかいた。

ああ、オシヤレヘアが乱れますよ！ なんて言える雰囲気ではなくて、私は黙りこくつて高宮さんの次の言葉を待った。

「だからつまり……あー……なんでそんな鈍いんだよ。少しは気づいてると思ってた俺がバカだった」

高宮さんの顔が、ほんの少しだけ赤くなっている気がする。

なんか、あれ？ この会話の流れって……いやいや、そんなわけが……

「俺、ずっとお前のことが好きだったんだよ」

私はパチパチと瞬きを繰り返したあと、思い切り目を見開いた。

高宮さんが……私を好き!?

心臓が大きく跳ね上がるのを感じ、思わず胸をギュッと押さえた。

な、ななななな何言ってるの!? こいつ！

「ま、待って下さい。会社バージョンの私を好きになるのなら、少しは話もわかりますけど……いや、それもどうかと思いますけど……い、今の私を見てどうして好きって言えるんですか!？」

会社での私は、流行のファッションに身を包み、それに合わせたメイクをし、アクセサリをつけて、完璧なOLを演じている。

だけど今の私といたら、かろうじてスッピンではないけど、熱のせいでドロドロに落ちたメイクに、ボサボサ頭。上下バラバラ、毛玉オプシオン付きのスウェットにピン底眼鏡。会社で見せている姿とはかけ離れすぎている。

「ああ、好きだ」

あっさり答えられ、どうしていいかわからなくなる。

もしかして、こいつ、相当目が悪いのか!?

「あの、高宮さんって視力いくつですか？　もしかして、私の今の姿見えてなかったりしますか？　この姿を見て告白するなんて……相当なゲテモノ好きですよ？」

自分で言っていて悲しくなるけど、事実だ。

「は？　両目とも2・0だけど」

み、見えてるんだ……というか、羨ましいほど視力がよくてビックリ。

私の慌てる姿を見て、高宮さんがまるで、ライオンが餌になる草食動物を見つけた時のような表情で、ニヤリと笑う。

よからぬ気配を察知し、身の毛がよだつ。

「む、無理です。付き合えません！　だからオタクなんですってば！　三次元の男性は無理なんです！　二次元しか見えてませんから！」

というか、あんたのこと嫌いだし！　……とは、弱みを握られてるからさすがに言えないけど、大抵の人はドン引きするだろうという一言を告げてやった。だけど、高宮さんは眉一つ動かさない。

「無理かどうかなんて、付き合ってみないとわからないだろ」

引く気配なんて微塵みじんもない。まっすぐに私の目を見つめて、距離を詰めてくる。

なんなのこいつ！　なんで引かないの？　頭おかしいんじゃないの!?　それとも嫌がらせのつもりか!?

「む、無理！　絶対無理です！　学生時代から『らぶどつきゅんメモリアル』略して『らぶメモ』の仲村くん一筋なんですっ！　仲村くんは、他人に対してちっとも興味を持ってない、クールな男の子なんですけど、一緒に過ごすうちに、私にだけ心を開いてくれて……とにかく彼しか見えないんですっ！」

なんとか引いてもらおうと『らぶメモ』の仲村くんに対する、溢れんばかりの愛を語ることにした。

これで引かない人はいないでしょう！　だって、自分でも気持ち悪いもん。

「ちなみに『らぶメモ』の攻略キャラは六人いるんですけど、私は仲村くんが好きすぎて他のキャラは攻略できなかったんです！　なんとなく浮気してる気分になっちゃって！」

ペラペラ話しながらも、怖くて高宮さんの顔を直視することができない。けど、あまりに反応がないので思い切って見てみると――

……あれ、さつきと表情が変わってない。なんで平然としてられるの!?

「じゃあ、その仲村くんとやらは、こんなことできるのかよ」

「え……?」

高宮さんは私が語っている間に、更に距離を詰めていたらしく、今の私達の距離は恐ろしいほどに近い。

そのことに驚いている間に顎に指をかけられて、ツイと上を向かされてしまった。いきなりのことに目を瞬かせていると、唇に柔らかなものが押し当てられた。

「……っ!?」

しつとりとしたマシユマロのような感触……

それが唇だと気づいたのは、離されたあとだった。

「な……っ、な、な、な何するんですか!?」

言葉が上手く出てこない。

年齢〓彼氏いない歴を更新していた私には、当然キスの経験だつてなかった。

そう、これはファーストキスだ。

「キスしたただろ?」

「か、軽く言わないで下さいよ!」

ゲームならファーストキスなんて一大イベントだ。それをこんなあっさりと奪つて……

このファーストキス泥棒!

「……なんかずいぶん焦ってるな。まさか、ファーストキスだったりしないよな?」

頭の中でギクツという擬音が響く。

見た目からして、恋愛に慣れてますという雰囲気この男に、恋愛経験がないという

ことがバレたら、一生からかわれるに違いない!

「ち、ちぎやつ……違いますっ! ただ、いきなりキスされたら、誰だつて驚くに決まつてるじゃないですか!」

出だしから囁んでしまったけど、それっぽい言い訳ができたのでよしとした。

だけど高宮さんは、何もかも見透かしているような表情をしながら、俯いている私の顔を覗き込む。

顔の距離があまりにも近くて、またキスされてしまうのではないかと警戒する。

慌てて両手で唇を押さえる私を見て、高宮さんは意味深な笑みを浮かべた。

「それで、俺と付き合うんだろ?」

キスの衝撃で忘れていたけれど、そうだ……そういう話をしていたんだつた。

「だから無理ですつて。私、リアルな恋に興味なんて……」

「じゃあ、バラされてもいいのか?」

うぐ……っ。

怯む私を、高宮さんは見逃さなかった。

「なんだつて言うことを聞くんて言っただろ? 覚悟決めろよ」

まさかそんな要求を突き付けられるなんて思ってたから言ったことだったのに、そんな覚悟、すぐにできるはずがない。

「さあ、どうする？」

オタクであることをバラされたら、この先の人生、きつと真っ暗闇……

バラされた時のことを想像した瞬間、私は頷いていた。

「決まりだな。まあ、今はお前にそんな気持ちがなくともいい。絶対に俺を好きにさせてみせるから、覚悟しとけ」

予想外の展開について行けず呆然としている私の頭を、大きな手がポンポンと撫でた。俯けていた顔を上げると、さっき私のファーストキスを奪った唇に視線が行ってしまっ。

どうして見てしまっんだらう。熱のせいで、どうかしてるのかもしれない。

「あの、そういえば……私のどことが好きなのか、まだちゃんと聞いてなかったんですけど」
ぜひともし詳しく聞かせて頂きたい。

このスウェット・ビン底眼鏡姿を見ても、私を好きだと言う理由を！

身を乗り出して聞こうとする私の頭を、高宮さんは大きな手で押し返した。

「今は言わない」

何をもったいぶっているのかと突っ込んでやりたくなっただけで、グツと堪える。何せこちらは弱みを握られているのだから……

長い物には巻かれろと、よく言いますからね。

「これから徐々に教えてやるよ。先は長いからな」

え、本当に付き合うつもりなの!? 彼氏いない歴二十六年に、ピリオド!?

恋人なんて絶対にできない!……ううん、いらなそう思っていた私に、彼氏!?

「うううう……頭、痛い……」

「おい、大丈夫か？」

ズルズルと崩れ落ち、床にへたり込んでいると、いきなり体が宙に浮く。何かと目を丸くしていると、高宮さんに抱き上げられていた。

まさかこんな短期間のうちに、何度もお姫様抱っこを経験することになるとは……なんて考えている場合じゃなかった。高宮さんの足は私を抱き上げたまま、寝室へ向かっていたのだ。

「な、何する気ですか!？」

「バカ、病人を襲ったりなんてしねーよ。そういうのは治ってからだ」

……治ったら、襲う気なの!?

内心パニックを起こしている私を、高宮さんはいつもの乱暴な態度からは信じられないくらい丁寧な、まるで壊れ物を扱うようにベッドに寝かせてくれた。

「……お前、よくこんなベッドで眠れるな。なんで枕の横にゲームとか漫画とか積むんだよ。地震でも起きたらアウトだろ」

「ごもつともな意見に、何も言い返すことができない。
枕の左右にはこれからやる予定のゲームと、これから読む予定の漫画がみつちり。まるで神社にある狛犬こまいぬのように、私を守ってくれている。

いや、地震が起きたら、本当にアウトだけど。

「……これがないと、落ち着かないんです」

「それから、これは何のコードだよ。寝相ねそうが悪かったら、首に絡まって死ぬぞ」

「ゲームの充電器のコードです。慣れてるから大丈夫です。どうぞそのままに……というか、ないと落ち着かないので、触らないで下さい」

高宮さんは珍しそうに私のベッドの周りを見ている。

病み上がりなのに、こんな羞恥しめづちプレイを受け続けるなんて……

ああ、眩暈めまいがする。

「……そういえば、どうしてウチの近くのコンビニにいたんですか？ 高宮さんの家ってこの辺じゃないですか？」

私がそう尋ねると、高宮さんは何か思い出したようで、リビングに向かう。そしてすぐにコンビニの袋をぶら下げて帰ってきた。ほら、と差し出された買い物袋の中を見てみると、額ひたいを冷やす冷却ジェルやスポーツドリンク、果肉が入ったヨーグルトが入っていた。

「家の近所で買わないと温ぬるくなるだろ？」

「え、えええ？」

「だから、見舞いに来たんだって。察しろ」

いつも余裕よゆう綽々しゃくしゃくの高宮さんが、さっき告白した時のように少しかだけ頬を赤く染めている。……もしかして、心配してくれてたの？

心臓が大きく跳ね上がり、トクトクといつもより速く脈を打ち始める。

な、何これ！ 病気!? いや、病気だけでも！

「まだ熱下あせがつてないんじゃないか？ 額に冷却ジェル貼るぞ。あと、テーブルにスポーツドリンク置いておくから、脱水症状すいすいしょうじょうを起こさないようにこまめに飲め。食料は適当に冷蔵庫に入れておくからな」

高宮さんのテキパキとした動作を見ながら、まだ本調子じゃない私は力の無い声で「はい」と返事をするしかなかった。

「じゃあ、俺は帰るから。本当なら朝まで面倒みてやりたいけど、お前それだと気を遣って休めないだろ？」

コクコクと頷くと、高宮さんは私の髪を梳すくように撫でた。汗ばんだ地肌に冷たい空気が入って、不覚にも気持ちがいい。

湿った地肌に触れるなんて気持ち悪いはずなのに、高宮さんは何度も私の頭を撫で続

ける。その表情は、今まで見たことないぐらい優しくて、戸惑ってしまふ。

「なんかあったらすぐに携帯鳴らせ。いいな？」

拒否できる雰囲気じゃなくて、私は素直にわかりましたと答えた。携帯を鳴らしたらどうなるんだろう。まさか、駆けつける気!?

……いや、ないない。それはないよね、うん。

「すぐに来るから、安心して眠れよ。……つか、そのビン底眼鏡は外して眠れ」

か、駆けつけてくれる気だ!

いつもの意地悪な高宮さんからは想像できない優しさを見せられて、どうしていいかわからない。

私、今まで彼にどんな態度を取っていたっけ? 考えても思い出せない。

「じゃあな」

部屋の扉がパタンと閉まった瞬間、私は大きなため息をついて脱力した。

これは何かの夢……夢なんだ……

ブツブツ呟いていると、頭がぼんやりしてくる。

重たいビン底眼鏡を外すと、うつらうつらと眠気がやってきた。

高宮さんは珍しそうに部屋を見てはいたけど、決してバカにはしなかった。絶対にバカにされる、気持ち悪がられると思ってたのに……

第三話 彼氏ができました?

『朝だ、起きろ……十秒以内に起きないと、キスするぞ』

「ううー……」

朝六時、携帯にセットしてあるいつもの愛しの仲村くんが目覚ましボイスが流れた。

このまま二度寝したら、仲村くんの夢が見れるかも、なんて思いながら体を起こすと、頭が妙にスツキリしている。どうやら風邪は治ったようだ。熱を吸収して粘着力をなくした冷却ジェルが、額から剥がれてブランケットの上にボサツと落ちた。

「あれ……あ、そうか。私、熱を出して……」

その冷却ジェルを見た瞬間、昨日の記憶が蘇る。

すぐに思い出したのは唇にあてられた柔らかな感触……私は無意識のうちに、指で唇をなぞっていた。

指とは違う。自分で自分の肌に唇を付ける感触とも違う。柔らかくてしっとりとしたマシユマロのような感触。

「キス、しちゃったんだ」